

第1章 概観（国土、民族、気候、社会、歴史等）

1. 正式国名

ラオス人民民主共和国（Lao People's Democratic Republic、以下「ラオス」とする）。ラオスの国旗は、青いメコン河に映る満月をモチーフとしており、革命で流れた人々の血を表す赤色が上下を覆う。青は繁栄、白い丸は国民統合を象徴する。

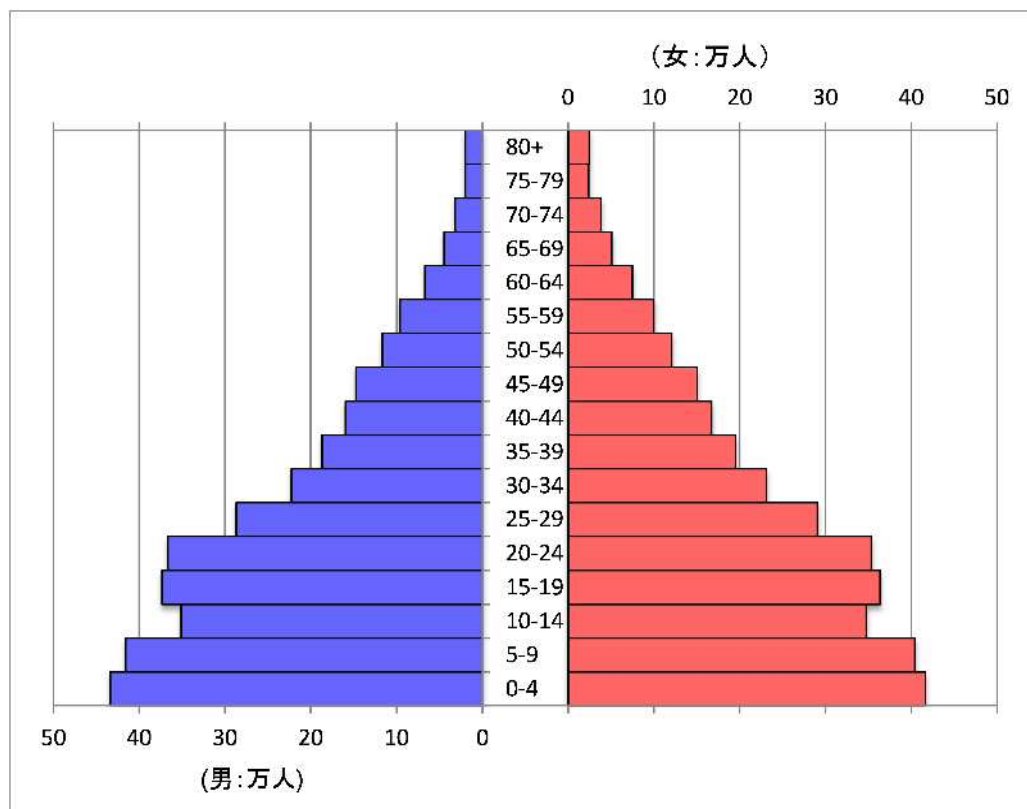


2. 人口

人口は約 669 万人（2014 年推計）。2014～2015 年の人口増加率は 1.9%と予想される。平均寿命は 67.6 歳である（Lao Statistical Bureau 推計）。

年齢別の人口構成を見ると、生産年齢である 15～64 歳が人口の 61%、これから労働市場に参入してくる 0～14 歳が 35.5%と人口の 3 分の 1 を占める。平均年齢は 21.6 歳で、周辺国と比べて最も低い（中国 36.8 歳、タイ 35.1 歳、ベトナム 28.7 歳、ミャンマー 27.6 歳、カンボジア 23.7 歳）（図表 1-1 参照）。

図表 1-1 ラオスの人口構成



（出所）Lao Statistical Bureau

3. 国土

ラオスの面積は 23.7 万 km² (日本の本州の面積とほぼ同じ)。インドシナ半島を北から南へ流れるメコン河に沿って長く延びる内陸国で、東はアンナン山脈に沿ってベトナムと 2,130km、西から南へ主にメコン河に沿ってタイと 1,754km に渡って国境を接する。北は中国、南はカンボジア、北西はミャンマーとも接している。

北部は 500 メートルを超える山岳地帯に盆地が点在し、中部から南部はメコン河沿いに平野が広がるものの、東部はアンナン山脈が南北に走るため山がちである。

森林被覆率は 40.3% (2010 年) であり、北部は近年、焼畑耕作の減少で森林が回復する一方、南部は商品作物 (ゴム、キャッサバ、コーヒー、サトウキビ) の大規模栽培で開発が進み、森林は減少傾向にある。

4. 首都

首都はビエンチャン特別市。人口は 79.7 万人 (2012 年、Lao Statistical Bureau 推計) で、人口の約 1 割を占める。日本との時差は 2 時間 (タイ、ベトナム、カンボジアと同じ時間帯)。

5. 気候

熱帯モンスーン気候。季節は大きく雨季 (6~10 月) と乾季 (11~5 月) に区分される。乾季は更に 11~1 月の冷涼な季節と 3~5 月の酷暑 (最高気温は 40 度近い) に分かれ、例年 2 月頃に、冬から夏へ季節は一気に変わる。雨季は例年 8~9 月に最も降水量が多く、年によってはメコン河やその支流で洪水となる。

ひとくちメモ (1): ラオスの洪水事情

ラオスの雨季は 6 月から 10 月頃までであるが、例年 8~9 月は最も雨の多い月である。ラオスの首都ビエンチャンはメコン河の河口から 1,500 キロ弱のところにあるが、標高は 200 メートルに満たない。メコン河は傾斜が非常に緩やかであり、メコン河上流で降った雨がビエンチャンに到達するのに約 1 ヶ月かかる。雨の多い年はメコン河やその支流沿いで洪水となるが、増水は非常に緩やかであり、住民は高床式の住居に住み、増水をやり過ぎたり、高台に住む親戚を頼って移動したりする余裕がある。20 世紀に入ってからのビエンチャンで最も大きな洪水は 1966 年に発生したもので、町の中心部が広く冠水した。これに次ぐのが 2008 年の洪水であり、ラオス政府が全力を挙げて、メコン川沿いに土嚢で堤防を築くなどして、浸水を最小限にとどめる努力をした。2008 年の洪水の経験から、ビエンチャンのメコン河沿いに新たな堤防道路が築かれ、公園の整備が行われた。

近年、地球温暖化の影響か、南シナ海からベトナム中部へ上陸した台風が、アンナン山脈を越えてラオス中部・南部を襲い、山岳地帯に大雨を降らせ、突発的な洪水を引き起こすケースが増えている。2009 年には、台風 16 号 (ケッサナー) がラオス南部を襲い、アタプー県では洪水によって死者が出た。また、2011 年にも台風 4 号 (ハイマー) や台風 8 号 (ノック天) がラオス中部へ侵入し、洪水など大きな被害を与えた。

ラオスでは、水力発電ダムの建設が進んでいるが、多雨によって貯水池の水位が上がりすぎた際に一気に放水するため、下流の河川流域の洪水被害が深刻化するなどの問題も見られる。

6. 民族

ラオ族が人口の 55% を占めるが、それ以外は少数民族であり、カム族(11%)、モン族(8%) など 49 民族で構成される (Population Census 2005)。

ラオ族はメコン河沿いの平野に住む一方、カム族などモン・クメール語族は北部 (ルアンパバーン県・ウドムサイ県) や南部の高原地域に多く分布する。モン族やヤオ (ミエン) 族などは北部山岳地帯の東部 (ルアンパバーン県、シェンクアン県)、アカ族などのシナ・チベット語族は北部山岳地帯の北部 (ポンサリー県、ルアンナムター県) に多く住む。

低地ラオ族 (いわゆるラオ族)、中地ラオ族 (モン・クメール語族)、高地ラオ族 (モン・ミエン族、シナ・チベット語族) という通俗的な 3 分類は、今でも広く使われる。

ひとくちメモ(2) : 少数民族の国ラオス

ラオスは人口の半数近くが少数民族であり、それぞれ独自の言語や文化を持っている。少数民族は北部山岳地帯や南部のメコン河沿いではない山岳地域に多く住む。北部に住む少数民族は、中国からこの数百年以内に南下してきた人々が多いため、中国文化の影響を強く受けており、日本と似た風習を持つ民族も少なくない。例えば、モン族は正月に餅をつき、コマを回す。

モン族の一部の人々は、第 2 次インドシナ戦争時に米国側に協力したことから、戦後、モン族の実に多くの人たちが米国へ亡命した。現在、ラオスに住むモン族が 46 万人であるのに対して、米国には 26 万人が住んでいる。モン族は民族のアイデンティティや一族の結束が強く、正月に着る民族衣装をラオスに住むモン族が刺繍して作り、米国に住む親戚が毎年買うなどして援助するケースが多く見られる。また、近年はインターネットの普及によって、米国に住むモン族とラオスに住むモン族の若い男女がネットを通して知り合いとなり、結婚して米国に渡るケースも多い。

ラオスにおける少数民族、特に多数派を占めるラオ族とモン族の関係は、外国人が想像する以上にセンシティブな問題であり、ラオス人との会話では口にしないほうが良い話題である。



(ウドムサイ県中国国境近くに住むムートウン族の少女)

7. 言語

公用語はラオス語である。ラオス語はタイ標準語と方言程度の違いしかなく、メコン河を挟んで対岸に当たるタイ北部や東北部の言語とほぼ同じである。

また、人口の約半数を占める少数民族はそれぞれ独自の言葉を持ち、そのほとんどは自分の民族の言葉と公用語であるラオス語の両方を話することができる。

8. 宗教

人口の3分の2が仏教徒（66.8%）であり、それ以外はアニミズムなどを信仰している。キリスト教徒も1.5%ほどいる（Population Census 2005）。

9. 教育

現行の教育制度は2009年に導入された「五・四・三」制（小5、中4、高3）で、大学・専門学校は3～6年である。義務教育は、小学校の5年間のみである。

従来、就学率の低さが問題であったが、近年は外国援助などによって山岳部の村落のほとんどに小学校が造られ、就学率は大幅に改善されつつある。しかし、小学校の増加に対して教師の育成が追いつかず、教育の質が問題となっている。退学率や留年率は依然として高い。

高等教育は2002年までピエンチャンのラオス国立大学が唯一の国立大学であったが、北部ルアンパバーン（2003年）、南部チャンパサック（2002年）、サワンナケート（2009年）にも大学が開校したため、現在、4つの国立大学がある。

近年の経済発展に伴い、私立の大学・専門学校の設立が急増しており、その数は50校を超える。その多くは、英語・会計・ビジネス管理など実用的な教育を行う単科大学である。ラオス政府は、工場の増加に伴う労働力需要に対応するため、技術・職業訓練校の設立にも力を入れている。

ひとくちメモ(3): 貧しい子どもにも開かれた教育

ラオスでは早朝に、お寺のお坊さんがたくさんのお坊主さんとともに托鉢をする姿が見られる。なかでもルアンパバーンの托鉢は有名である。このお坊主さんたちの多くは、田舎の貧しい家庭の子どもたちで、仏教徒ではない少数民族である場合も少なくない。貧しい家庭の子どもたちに高い教育を受ける機会を提供しているのが、このお寺の出家制度であり、出家してお寺に入る子どもたちのほとんどが教育目的だと言っても過言ではない。ルアンパバーンのお寺で小坊主をやっている子どもたちのなかには毎日、観光客をつかまえては外国語を熱心に勉強し、語学を習得して、観光業界で働くケースも多い。お寺にとっても、農村部や少数民族に仏教を普及するという効果があり、お互いにメリットがある。



10. 通貨

ラオスの通貨はキープ (kip)。ラオス・キープは 1990 年代に入ってから 1996 年までは 1 ドル = 700 ~ 900 キープと比較的安定していた。1997 年 7 月に隣国タイに始まったアジア通貨危機のため、2002 年までに 1 ドル = 10,000 キープを超えて下落した。2003 年以降、アジア通貨危機から脱したことに加え、鉱産物などの輸出が順調に伸びた結果、ラオス・キープはやや強含みで推移し、2014 年 6 月 11 日現在、1 ドル = 8,064 キープ、1 円 = 79 キープである。

11. 歴史

ランサーン王国の誕生から仏領インドシナまで

ラオスは 14 世紀にファージェム王が建国したランサーン王国（「百万の象」の意）に起源を持つ。都は現在のルアンパバーンに置かれた。16 世紀になるとランサーン王国は興隆するビルマに押され、ルアンパバーンからビエンチャンへ遷都した。

ランサーン王国の首都ビエンチャンはインドシナ各地を結ぶ交易都市として 17 世紀に最盛期を迎えたが、海上交易の発達とともに徐々に勢力を失い、18 世紀にはルアンパバーン、ビエンチャン、チャンパサックの 3 つの王国に分裂した。

19 世紀半ば以降、フランスがベトナム・カンボジアへ支配を拡大し、1887 年に仏領インドシナ連邦を設立したが、翌年にラオスも保護国として連邦に編入された。

内戦からラオス人民民主共和国の樹立まで

1949 年、ランサーン王国はフランス連合内の協同国として名ばかりの独立を果たしたが、フランスからの完全独立を目指す勢力は、スパヌヴォンを首相、カイソン・ポンヴィハンを国防大臣とするパテートラオ臨時政府を樹立した。王国政府は中立国としての立場を取ったが、北東部の山岳地域を押さえる左派勢力（パテートラオ）は北ベトナムと協力する一方、メコン河沿いの諸都市を押さえる王国政府は次第に右派及び米国との協力を強め、左派勢力・北ベトナムと対決した。隣国ベトナムにおける第 2 次インドシナ戦争の進展に伴い、ラオスでも内戦が激化していった。

1975 年 4 月に北ベトナム軍がサイゴンに入り南ベトナム政府が無条件降伏すると、同年 8 月にはパテートラオ軍がビエンチャンに進駐した。同年 12 月に人民民主共和国の独立が宣言された。

ひとくちメモ (4): 陥落と解放 ~ 第 2 次インドシナ戦争を見る視点

1975 年 4 月 30 日に北ベトナム軍が南ベトナムの首都サイゴンへ入り、南ベトナム政府が無条件降伏して、第 2 次インドシナ戦争は終わった。日本ではこの史実を「サイゴン陥落」として学ぶが、現在のベトナム政府やベトナム人は「サイゴン解放」と呼ぶ。ラオスでも同様であり、「サイゴン解放」に続く 1975 年 8 月のパテートラオ軍のビエンチャン進駐は、「革命」と並んで「解放」と呼ばれることが多い。

ラオス人民民主共和国樹立後から現在まで

1975年に設立されたラオス人民民主共和国は、農業の集団化、計画経済の導入によって社会主義の建設を進めるが、農産物・消費物資の著しい欠乏が発生した。1979年には社会主義化を一時中断し、1983年には再び社会主義化の推進を行ったが、ペレストロイカ政策を実施したソ連共産党の指導のもと、ラオスでも1986年に市場メカニズムの利用と対外経済開放を柱とする新思考政策が導入された。

1980年代後半から1990年代初頭にかけて、ソ連・東欧諸国で共産・社会主義政権が相次ぎ瓦解すると、ラオス政府は危機感から新思考政策を本格化させ、西側諸国からの援助・投資を積極的に取り入れていく。1991年に憲法制定（但し、2003年に改正されている）。

1997年7月にASEANへ加盟したものの、同月に隣国タイで始まったアジア通貨危機の影響を受け、経済は低迷した。ラオス政府は景気の刺激を目的として、多くの国境を外国人に開放したため、大量の観光客が流入し、ホテル・レストラン・観光業が急速に発展した。

アジア通貨危機の影響を脱し始めた2003年、オーストラリア資本が開発した大規模なセボン金銅鉱山が操業を開始。鉱産物の輸出が大幅に増加し、経済発展に弾みをつけた。

ラオスは2004年にASEAN議長国として首脳会議、2009年にASEAN加盟国のスポーツ競技会であるSEAゲーム、2012年にはASEM会議を開催するなど、国際社会での存在感を増している。2013年2月にWTOへの加盟を果たした。

図表 1-2 ラオスの歴史

年月	略史
14世紀	ファージェム王、ランサーン王国を建国。首都ルアンパバーン
16世紀	ランサーン王国の首都、ルアンパバーンからビエンチャンへ遷都
17世紀	ビエンチャン、インドシナの交易拠点として繁栄
18世紀	ランサーン王国、ルアンパバーン、ビエンチャン、チャンパサックの3王国に分裂
1886年	仏領インドシナ連邦の設立
1888年	ラオスは保護国として仏領インドシナに編入
1949年	ランサーン王国、フランス連合内の協同国として独立 パテートラオ臨時政府の樹立
1954年	ジュネーブ協定調印
1975年4月	北ベトナム軍がサイゴンに入り、南ベトナム政府は無条件降伏
1975年8月	パテートラオ軍、ビエンチャン進駐
1975年12月	ラオス人民民主共和国樹立
1976～78年	社会主義化の推進と経済の混乱
1979～82年	社会主義化の一時中断
1983～85年	再度の社会主義化推進
1986年	新思考政策の導入
1991年	憲法制定
1997年7月	ASEAN加盟
2003年	セボン鉱山操業開始
2004年	ASEAN議長国として、首脳会談を開催
2009年	ビエンチャンでSEAゲーム開催
2012年	ASEM会議を開催
2013年2月	WTO加盟

ひとくちメモ (5): 新経済メカニズムとシスーク氏の帰国

1980年代後半に、ソ連や東欧諸国で共産政権が瓦解したため、それらの国の支援に依存していたラオス政府の危機感が高まった。1989年、カイソン首相(当時)は、支援を求めるためにパリ、モスクワ、東京を相次いで訪問した。この3都市訪問のうち、パリを訪問した際、かつて南部パクセーを拠点とする大資本家であり、革命後はフランスへ亡命していたシスーク氏をカイソン首相自ら訪ねた。カイソン首相は、海外に住む亡命ラオス人を呼び戻すため、まずシスーク氏に帰国を要請した。要請に応じて帰国したシスーク氏には家屋や土地の一部が返還されるとともに、国会議員の地位が与えられたという。シスーク氏の息子から直接聞いた話である。1989年以降、全方位外交が始まり、新経済メカニズムの導入が本格化した。

ひとくちメモ (6) 多民族国家ラオスのお祭りとお正月

ラオスの雨季は、僧侶は托鉢を止めて寺に籠もって修行を行うパンサー(安居)と呼ばれる3ヶ月間と重なる。この時期は、農民は稲作を中心とする農繁期でもあり、結婚式も行われぬ。パンサーの期間の始まるカオ・パンサーは7月の満月、同期間の終わるオークパンサーは10月の満月であり、人々は寺院へ行って托鉢を行う。ピエンチャンでは、オークパンサーの日の夜にメコン河で灯籠流し(ローイカトーン)、翌日にメコン河でボートレースが行われる。

雨季が終わるとお祭り、お正月の季節である。オークパンサーから1ヶ月後の11月の満月には、ラオスの象徴でもあるタートルアン寺院で、タートルアン祭りが行われる。

また、このころモン族は陸稲の刈り入れを行い、稲刈りが終わった次の新月(通常、11月末から12月)にモン族の正月となる。モン族を研究している安井清子氏によれば、モン族の正月は収穫祭的な意味合いを持つという。モチをつき、コマを回し、男女が鞠を投げ合うモン族の正月は、どことなく日本の正月の風習を思わせるものである。

いわゆる西暦の正月はラオス人にとってはあまり重要ではなく、役所や企業も12月31日の午前中まで仕事をして、午後はさすがに飲んで踊るお祭りとなる。1月1日は休日であるが、1月2日からは通常業務である。

旧暦の正月は例年1月後半~2月前半ごろであるが、ラオスには中国系、ベトナム系の住民が多く、また少数民族の中にも旧暦の正月を祝う人たちが少なくない。

そして、一年中で一番暑い、4月14日~16日の3日間はラオ族の正月であり、お互い水を掛け合う水掛祭りである。ルアンパバーンでは伝統行事が執り行われるが、ピエンチャンなどその他の町の人たちにとっては、大音量の音楽をかけて飲んで踊り明かす1週間となる。

ラオ族の正月頃から、雨の降る日が徐々に増え、農繁期が始まり、祭りの季節は終わる。



お正月(ルアンパバーン)